

抑留記

三重県 北村 喜多雄

入営より終戦（牡丹江まで）

大正十一（一九二二）年八月二十日、三重県度会郡小侯町、父 石松、母 たつゑの長男として、生まれる。

昭和十二（一九三七）年、小侯尋常高等小学校高等科卒業。

昭和十七年、青年学校本科五年卒業。

当時の家族構成、祖父、父母、弟五人。

昭和十七年六月下旬、徴兵検査の結果甲種合格（六十八人中八人）。

八月下旬工兵の通知、十月下旬現役証書、役場より配達。満州第三六一一部隊へ広島集合昭和十八年一月十五日とあり、十三日当町宮川駅より同年兵石井君、兵事係岩尾さん、付添いは無用と言ったが父、伯父も

一緒に乗車し、翌日到着。父等は宮島に参拝に行った。

十五日、広島西練兵場において、冬用新品の襦袢袴下、らしやの軍服は金ボタン、襟章は刺しゅうの一つ星、帯剣、帯革ももちろん新品、塗油してあった。早速私物を集めて風呂敷に包んだが、真綿でつくったチョッキがなくなっていた。早々に軍隊での泥棒にやられてしまった。当日、また旅館に泊まった。

翌日汽車に乗り、下関より釜山プサン、閩門トモシ經由東寧トウネイへ一月二十一日到着。満州三六一一部隊（第四六野戦道路隊）坂場隊第三班に編入。初年兵教育隊であり、百三人一期の検閲（六カ月間）終了後、各中隊に配属された。

十九年四月中旬頃、隣の野重隊の跡へ工兵司令部より出張の新設田嶋隊に派遣、十二月解散、帰隊。

同月中旬頃チャムス六一九部隊に派遣、二十年五月頃六一九部隊とチチハル一三九二六部隊（関東軍工兵学校）合併のため列車にてチチハルへ（北清鉄道でなく、この線に並行するように北の線）。

八月七日七時頃、将校馬当番兵迎えに行く前に部隊へ慌てて帰隊。突如非常呼集のラッパにて一斉に軍装を整えて待機。翌日命令により北清鉄道コウコウケイに集合、ハルビンへ十四日着。

十五日貨車の中にて口ノ休戦とのこと、またチチハルへ帰るのかと思っていたら無条件降伏であった。十五日天皇の玉音放送があったらしいが全然知らなかった。翌日ハルピン女学校へ入り武士の魂であるとして銃の手入れをし、雨の土砂降りの中、ハルビン競馬場へ集積した。ソ連の要らない三八銃を手入れせよなどとほざく馬鹿将校は誰だったか知らない。後になってから帯剣も取り上げられた。女学校で下士候三、四人自決したらしい。四、五日たってから鉄道三連隊の跡に入り、数日して無蓋貨車にて北清鉄道ヤブローニー駅で下車、行軍して海林の弾薬庫に収容された。下車させられた所から満人等がシベリア鉄道並みに鉄路を広げていたし、道路沿いには同胞の死体がたくさんころがり、また湿地帯の丸太道には編上靴巻脚絆の足が、二、三あり、ロスキーのやり方に腹が立った。休憩

中、老人が孫らしい男の子の手を引いてとほとほと歩いて行った。今まで光景を見て、熱いものが込み上げてくるのをどうする事もできなかった。ラコの邦人婦女子の収容中の人たちがさくから手を振り「ロシア兵が毎夜やって来るので一緒に連れてってください」と涙ながらに言われたが、どうする事もできなかった。

二、三日してから編制替えがあり、帰国のため千人単位の大隊であり、一〇三大隊であった（これはシベリアの作業大隊）。海林には十月上旬頃までいたが、炊飯の水は消火壕から、燃料は引込線の枕木、電柱等を十字くわで引き抜いたり倒したりした。その当時、同年兵入江の訪問を受け、林は下着上下を、私は金十円をあげた。彼は階級章を外しており地方人となり帰国すると言っていたが、いまだに帰国していない。時々警戒兵が顔を見せ、マンドリンを突きつけられ万年筆を取られた。皆も時計や万年筆はやられた。私は時計は背のうちの中に隠してあり助かった。

十月十日前後の頃、牡丹江から汽車にてウラジオストクからスコラ東京ダモイとのソ連の通達があ

り、大隊長高畑大尉の下に行軍に移る。快晴の天候にて暑くて喉がひりひりし、三メートルくらいから落ちる水を飯盒に受けて飲んだ。余りにも臭いので駆け上がって見たら田圃のようで、兵士が真っ黒に変急し、お腹がばんばんに膨れウジが真っ白にたかかっており、手を合わせた。牡丹江市手前に宮川くらいの川あり、川床に太いすすのようなものがゆらゆらしていた。皆、川の中に入り飯盒二杯も飲んだ。少し臭かった。駅には貨車が待つており、二段蚕棚が作っており、五十人くらい乗車したようで、長い長い貨車列車であった。

クリドール―テルマー―八〇五

私ら海林一〇三大隊がテルマに向かって行軍中、一〇二大隊の兵士はU.S.Aのマークの付いた多量の自動車で追い越して行った。テルマの小隊での食事は一応三食あったがパンの分配には苦労していた。最初の作業は墓穴掘りであり、パール組とスコップ組と分かれ、たき火をどんどん大きくして三交代で作業した。

我が班でもトルチャ電信隊の現役初年兵が下痢が止まらないと言って三十分の一、二回便所に通っていたが、二日目の朝眠ったまま目覚めなかった。起床の号令に起きてこない兵（初年兵、高齢の補充兵）が多かった。三分の一くらいは死去したようである。陸上勤務隊の高木、佐藤、両高齢兵も作業休で休養していた。私もいつも腹をすかしていたが、食事ができなくなった。コウリヤンがゆの香りが鼻につき、むかむかしてくるし、体はだるいし便秘でふらふらするので医務室へ行った。日本の軍医大尉さんで、目を見て即黄疸との事でリュウマという薬をもらって班内休養。翌二十一年二月十日まで休んでいた。

十一月某日朝、一発の銃声がして床世田二等兵が銃殺された。収容所の柵内一メートルの所に鉄条網があり、立入り厳禁ではあったが、立ち入ったわけではなく、鉄条網の下から手を出し、きれいな雪を取っただけである。

入所当時の点呼は大変である。必ず五列、ソ連将校下士官がアジン・ドバー・トリリー・チェティリーとわ

れわれの肩をたたいて教えていき、途中忘れるのか、また初めからやり直したりした。零下三〇度以下で、しかも編上靴であり、足踏みして足を暖めたりした。ソ連兵の算数のできないのには閉口した。特に掛け算は小学二年以下だろうと思う。作業休中、食事は余りとらず戦友にあげた。非常に喉が渴いたが、電信隊二年兵の家野兵長に所内の井戸から水を汲んでもらって大変お世話になった。

食も進むようになり、大分回復しつつあった二十一年二月十日、身体検査（ズボンを下ろし尻の皮を引っ張る）の結果二級となり、二月十一日八〇五收容所に自動車で移動した。被服は綿入れの上衣、ズボン、毛皮のシューバ、フェルトの長靴、ロシア式手套、防寒帽、靴下はなく赤ん坊のおむつのごとき布ぎれの足巻等、防寒被服は最高であったと思う。收容人員は五百人ほどであった。ナチャニク（收容所長）の説明は斉藤通訳により伐採作業であり、五メートル五十五センチ、切り口で二十四センチ以上ということで、我が小隊は白井軍曹以下三、四十人くらい。当分隊は記録

四年兵渡辺兵長、根切りタポール 林、切り倒し 坂上・小野里、玉切 私と中川。作業きつく何人も交代するので忘れたが、ただ一人、中川と名乗る兵と話したところ、日々八十切か九十切もつくっていた。他、枝打ち 補充兵の栃原外一人、橋本補充兵 枝焼。渡辺君は枝打ちや枝焼の応援をしていた。ノルマは一人一・五立方メートルであった。最初の日プロホーラポーターでナチャニクや瀬野少尉、藤本曹長にも文句を食った。一生懸命働いているのにと思った。要領がわからず木を倒してばかりで玉切をしなかったのだ。翌日はむちゃにノルマの達成ができた。毎朝作業が始まると玉切る木がないので切り倒しもした。倒した木、次の木、引っかかって倒れないので、その木を切り、また引っかかり、次の木を切りかかり、三分の二くらいのところから木が裂けて踊り上がり一度にどうと倒れ、うまい具合に二人とも枝と枝の間に入り奇跡的であった。「おーい、中川、大丈夫か」と叫んだら、にっこり笑って手を上げた。

この頃だったと思うがシラミが多量発生しているの

で入浴、四十センチ・二十センチに二十センチほどの深さの桶に湯一杯とキャラメル四個分の石鹼で体を洗い、後のもう一杯は上がり湯である。陰毛と腋毛を全部そられ、襦袢袴下の交換、上衣ズボンは熱気消毒を行い、一月くらいでシラミ退治は成功した。

四月頃と思うが、馬が五十頭くらい木材搬出のために来た。我々の小隊中から厩当番に白井軍曹はじめ十人くらい二十四時間交代で勤務に付いたが、馬糧の大麦をペーチカの上で炒って両手でもんで毎日のように食べた。またコウリヤンの麩と間違つてトウモロコシの粉が麻袋一個紛れ込み、大急ぎで厩の床下に隠し、申し送りで毎夜のように全当番がおかゆにしたり団子にしたりして食べた。病気の馬が二頭いたが、ソ連側が処分し既まで燃やしてしまったが、夜中焼いている馬の股肉を鎌で切り取って、塩だけは相当あったから、ロシア人獣医は病気の馬だから絶対食べると言っていたが、百度の湯で煮るのに大丈夫と雪の中に隠し、当番の夜ごと皆で食べた。

いつ頃か忘れたが、捕虜用郵便と印刷された往復葉

書が当八〇五收容所に来た。各人に一枚ずつ配給されたが、「捕虜」の文字が気に入らぬと、出さない人も相当いたが、十月頃多くの返信が到着した。二十二年か二十三年と思う。今、日本で『異国の丘』という歌が流行していると書いてあって、私は第一回返信到着を見て早速通知の葉書に、余分な事は書かず、元気で暮らしていると簡単に書いた。十月、返信が届き、祖父と弟四郎が死亡の由、父が書いてよこした（四郎は、焼夷弾をなぶり、油脂弾のため全身火だるまになり死亡）。

厩当番、草刈りに精出していた。パン車らしき馬車を通った。ロシア人の御者に「コマンシルフレエーブダ」と挨拶した。車を止め黒パン一本もくれた。半分以上くらい食べ、友に残りをあげた。皆大喜びであった。このようなロシア人もいた。また、ある日、草刈り中、左手一指二指間に鎌先が刺さり、夜医務室で処置してもらったが、パンパンに腫れ上がり化膿した。膿を取ったらじき快癒したが、今もその痕がある。

二十三年の一、二月頃と思うが、身体検査の結果一

級という事で、桑名出身の水谷曹長が小隊長であった。三交代で製材小隊で枕木を三百本造っていた。私の相棒は西野と名乗る初年兵で、途中ハラシヨラポーターになり民主学校へ講習に行った。次に交代で来た久保初年兵もハラシヨラポーターになり、分所で造った勲章のようなものを左胸の物入れボタンにぶら下げていた。当時瀬野少尉は将校収容所へ送られたのか居ず、藤本曹長が大隊長で君臨していた。

二十三年春頃と思う、その頃から民主運動なるものが活発となり、斉藤なるオルグが当分所に来た。最初は藤本が任命したらしく佐久間と名乗るオカ上がり米つき兵が、反ファシスト民主委員会の名でカントーラに詰めていたが、いつの間にかいなくなった。斉藤が委員長になった頃から、元憲兵、警察官のつるし上げをやらせた。藤本は大隊長のくせに赤松憲兵兵長を先頭切つて色々、検事でもあるまいにハルビンにおける行動を質問、つるし上げた。奴はカントーラにいるので兵の身上書を見て知っていたのであろう。また真面目な下士官を、日直に毎日ついでおるのに、小さなこ

とをほじくり、つるし上げたが、どうでもしてくれと開き直り、後が続かなかつた。非常に気の毒であつた。

五月頃と思う頃身体検査があり、製材の者は後にしてくれとのことであつた。検査でドーマオデハイ（班内休養）であつた。ところが早く検査に行つた者はダモイ組に入った（ドーマオデハイ以下の者も）。一カ月後の検査で今度はオカになり一カ月半も休養し、その間製材小隊の給料二カ月分三百ルーブル手に入り、パンや鮭の薫製、タバコ等を買入れ、友にも分けた。また厩当番になり、馬に夕食を与えて、夜は山の草地に全部放牧した。夏の夜は十時を過ぎても新聞が読めた、朝は二時前には明るくなった。七月頃だつたと思うが、放牧のため乗馬して他の馬を追っている時、乗馬が突然他の馬の後に付いて行き、急斜面を駆け下りた。裸馬の背中より頭の方へ滑り落ち、手をついたため右ひじを脱臼した。五年兵の松原兵長が柔道初段との事ですぐ入れてくれたが、余りにも痛いので医務室へ行つたが陸軍歯科医少尉だから、ひじをさわつてみ

て、うまく入っているとして首から手をつり、間にゲートル片方巻いたものを挟んで終わり。葉も全然つづけてくれなかった。葉で置いてあるのはリバノールくらいで、ヨーチンもなかった。一カ月くらい休み、今度トロッコ道修理に出た。召集兵らしき下士官の温厚な方で、皆の装具番等し、気を使ってくれた。またアクトドローガ（自動車道修理）にも出たが適当にノルマをつけてくれた。

ひじの方も相当良くなり、今度は御者でトロ道（丸太の線路）で二メートル七七センチの枕木材の運搬をやったが、あるとき積込み中トロッコが馬もろとも引っ繰り返り、直径一〇センチの切り株の上に馬が倒れたがどうする事もできず、ナチャニクの官舎のすぐ裏であるのですぐ報告に行った。馬の脇腹に手を当てると切株が皮越に当たった。自分の体重で貫いたようであった。ナチャニクは拳銃二発発射し、馬は即死した。食肉にするのだろう。ソ連は国の財産にはうるさい国だが、ナチャニクの家の裏で報告が早く適切であったのか何のおとがめもなかった。これを機に、積

込みの場合には、かじ棒もろとも馬を外すように進言し、即実行された。日本の軍馬らしかった。今でも大変かわいそうな事をしたと思っている。

十月中旬頃から我が八〇五から高齢者、弱兵たちが大多数帰国し、現役兵の丈夫な者が残された。その中の一人として隣の八〇六収容所へ移動した。八〇五には枕木積込みのため引込線があり時々積込みに行っていた。私は伐採作業中には度々真夜中に汽笛が鳴り道床用の切り込み降ろしをさせられたが、後の方になってから貨車にブルドーザーで積み込んで来る貨車の側板下ろしと車間に板を並べるだけとなり、非常に楽になった。

万年飢餓状態であり、雪中作業帰途ジャガイモが、麻袋の穴から落ちて行くので、それを拾って飯盒で煮て、蓋を開けたら馬糞が上に浮いているのを手製のスプーンでかき回し、ジャガイモを食べた。今では考えられない事である。私ばかりか他の人々もイモと糞を一緒に煮た。みんなであった。

牡丹江―テルマ

我らの車両には原隊の者は一人もおらず、トルチャの電信隊の初二年兵に補充兵、関特演の五年兵、電信隊の軍曹が長いらしかった。私の軍装は武器を除きまだ完全であった。軍服冬服（鉄三で交換したように思う）、上段に寝て、青春時代に思いをはせた。

家業の農業をしながら馬車にて壁土、砂利等建材の骨材を販売して家業に従事したが、家の建築が少なくなり、山田郵便局に勤め、電信課の配達人に臨時として二カ月採用された。日給九十銭であり、父も驚いた。当時、大工が七、八十銭だった。十二月頃、信使（後の通信員）として六月まで六カ月、電信課集配手の辞令をいただき二年勤めたが、本採用は日給八十銭で半年ごとに三銭か五銭の昇給で、月三十円くらいなのに、常時ガソリンが入手困難にて（配給）貨物自動車は動かず木材等皆荷馬車ばかり、一日最低でも十五円くらいかかる。一日でもって父の命により辞職して馬方をし、葉煙草、稲作を、昭和十七年十二月まで労働した。十六年三月二十一日、木材搬出中馬車にひ

かれ、右大腿骨折し、半年も休業した事を思い出していた。

綏芬河から南下していたが、いつからか太陽が反対の方から出ていると言って騒ぎだした。どうも北上しているようであった。列車が止まれば生理現象のため線路脇に用足し場所を探すが、先行部隊の糞で足の踏場もないほどであった。時々黒パンやコウリヤンのおかゆが配給されたが、少量であり、いつも空腹であった。日中は引込線に入った。多数の無蓋車の列車は満州より略奪してきた農務鉄管、トタン板、建具等々、あらゆる物資を満載して幾列車も通過して行った。夜になると全速で目的地を目指し走って行く。大きな駅に止まった。ホームの子供に、前方を指差しモスコイ、後方を指差しウラジオストックと話した。理解したらしくモスコイ方面へ走っているようだった。こはハバロフスクであった。止まったり走ったり、列車は西行から支線に入り終点らしき所で下車させられた。

クリドールとの事で温泉があるとの事、分岐点はイ

ズベストコーワヤ（石灰）との意味だった。三、四日もクリドールにおり、シラミ退治、肌着を飯盒に入れて煮沸する。洗顔、ひげそり、熱湯のおしぼりで肌をふいてさっぱりした。十月二十八日か九日頃命令が出て、行軍が始まる。内地の一月末の気温のような気がした。外套着用、軍手、黒バンを携行、山道である。二日くらい歩いた所から雪が積もっており鉄道があつた。枕木だけの道床沿いに歩く。この鉄道建設に我々は労働させられると思う。宿舎に着くといつも黒バンと雑食スूपが出た。皆座ったまま眠った。ペーチカ一つだけれど人いきれで余り寒さは感じなかった。十一月三日、明治節である。雪中行軍は、編上靴はこちこちになるし、排せつには大いに困惑。コンボーイのダワイダワイ、ベストラ、ヨッポイマーチと追い立てられるし手はかじかんで寒くて閉口。宮川くらしいの川があり、木造橋が架かり、砂利の川原もあり、半凍りで水も流れていた。一週間歩いてやっと収容所に入った。我が兵舎の小隊には現伊勢市出身の石田太郎曹長がおり（収容中にロスキー任命准尉）、私は三年兵で

はあるが、四年兵ということにして大きな顔をしていた。

八〇六収容所―ナホトカ―帰郷

また冬になった。八〇六の伐採をやりだした私は、馬とは非常に縁が深く、工兵でありながら一期の検閲六カ月間過ぎてすぐ中隊長の馬当番兵の命令。他隊でも隊長の馬取扱兵として命を受け、シベリアで馬と共に作業したのである。また二十四年冬にも馬そりで木材を搬出し、暖かくなり汽車道床の斜面の草張り、排水路の岩張り等をしていたが、ペーゲース（駅舎官舎の大修理）作業で荷馬車の御者になり、砂や小石（砂利に似た物）や切れ目の入った板（フランドン）模様削目のある囲板等を作業場へ届けた。

二十四年の夏頃の事であったが、ロシア人監督と二人で中食携行で八一〇収容所跡と思われる無人ラーゲルのペーチカのれんがを小さなボールと金づちで取り外して持って来た。道中彼とは片言同士で話し合った。内容は「スターリンニイハラシヨ、近いうちヤポ

ンスキ、フシヨダモイ、マツオカアブラネート」スターリングラード攻防戦の時、君ら関東軍が攻め込めば、俺たちもシベリアに連行される事もなく、君たちもこんな所に来なくともよいのにと語りながらもタバコをすすめてくれた。翌日は一人で取りにいき、全部で三回は行ったようだ。ペーゲースの期間中御者は非常に自由で、ロシアの人々を乗車させてやった。御者台は三人乗りであった。あるとき金髪で青い目の十八、九歳の娘と七歳くらいの弟をサジィツンと横に乗せたが、素肌の腕がふれ、肌が密着し甘い香りがしたが、で、素肌の腕がふれ、肌が密着し甘い香りがしたが、シベリアで丸四年も経過しており、給与も少し良くなっていたが、やはり慢性的飢餓症状だったから男性のシンボルはびくりともしなかった。彼女は爆破屋の娘であった。生きておれば七十歳台のおばあさんであろう。

所内環境状態はよくなり、正門の手前には洗面所があり、いつも水があり、床屋は毎日営業していた。

民主運動では、井口という分所議長やアクチーブが

する、文科部、啓蒙宣伝部、生活部、作業部等の選挙は傑作であった。まず候補者を定員だけしか選ばない。そして選挙である。ソ連ではこんな非民主的な選挙が行われているのだろうか。二十三年、四年を通じて民主運動なるものが盛んになり、毎夜のように初年兵の地区講習の受講者が講師となり、マルクス・レーニン主義、ソ連共産党史、日本共産党史等を講義し、ベセーダ（テスト）も度々あった。セメント袋の紙に紫のインキにペンで書いた。たいした問題ではなく簡単であった。反動はダモイさせないとかいっているので神妙に聞いていたが、難しい事について質問したら答えに窮していた。わざと知らんふりしてやっているのに分からない、今度までに調べて来ますと言って大汗かいていて、かわいいものであり、本当に共産主義や党が分かっていたのか疑問である。昼食後に徳田は新聞輪読会もやり、アクチーブは大した頭ではなかったが作業は熱心にやっていた。八〇五にいたアクチーブや藤本の顔は見なくなったが、ダモイの口に入り二十三年中に帰ったのかもしれない。八〇六のアクチーブたち

は毎夜のごとく会議をやっているのか就寝は遅く、日中の作業も熱心であり気の毒であった。八〇六には、ロスキー任命初年兵の幹候らしきよく太った男が大隊長で、井口議長旧軍に代わり分所を牛耳っていたが、つるし上げもなくダモイも近いと平穩無事で、平塚運動（平塚小隊が一五〇%、二〇〇%というノルマをこなしていた）のせいかつるし上げもなく（対象者がいなくなったのか）作業に励んだ。労働者農民の祖国ソ同盟強化せよ、など言っているアクチーブは本当にそう思っていたのだろうか。

九月中旬頃帰国命令で作業停止。日ごと共産教育、労働歌練習、ダンスのレッスンなど気楽な日々であったが、貨車が到着。ウシモン駅に多数の引込線があるので他の分所の者も来るとの事で、帰還専用車らしく、資材等相当のつており、共産党のスローガンを書いたプラカードを打ちつけたりと、外壁は宣伝文句ばかりである。車中は蚤棚二段だった。ペーチカも据え付け、薪水も積込み、ロシア式綿入れ半オーバーにどんなズボンかもダモイの嬉しさに大分忘れた。背の

う、飯盒は持ち帰った。ナホトカに着いたら大勢の兵がいて、まず幕舎へ入る。帰国名簿はロシア文字のアルファベット順であり、年配の下士官らしき北村小隊であり、アクチーブの連中は我が小隊には一人もいなかった。順番が来ないので作業に出た。二日目の昼前、作業中止の伝令が来て幕舎へ帰った。税関検査の説明があり、あらゆる写真印刷物、ピシビシのブマーガ（手記の紙）、タバコ二百本マホルカはだめとの事。八〇六での帰国準備の時ペーゲース作業の友から貰ったルーブルで二十本入りのタバコ、キーフ、バミール各五個ずつ、落下傘の絵のタバコ五個、乗船時に十個にすればいいと思っていた。一夜明けて乗船、アルファベット順に呼ばれて英彦丸に乗船、一番下船倉に入る。二日目の朝、日本が見えるぞと言う声に甲板に上がって故国の山を見る。兵隊二年八カ月、終戦後満州に一カ月、シベリアが丸四年一カ月、計六年十カ月ぶりだ。

たしか二十四年十月二十三日と思う、舞鶴湾に入り、皆の名簿の提出を求められたが、ラーゲリ等詳し

いことは書くなど北村は言った。私は生年月日、本籍地等、ラーゲル名等、正当に書いたが、井口をはじめとするアクチーブの奴か脇山の差し金か上陸禁止となり、一日遅れたマガダンからの帰国兵はすんなり上陸した。ようやく上陸したが、何しろアルファベット順の編成だから知人も一人もいなかった。上陸してすぐ真っ白なDDTをかけられ入浴した。新被服が支給され、着替えて、金千円貰ったので売店で眼鏡を買った。軍隊より支給された眼鏡は四年間の強制重労働の結果、影も形もなくなっていた。各県の世話課出張所があり三重県へ行く。チチヘルから別れた小崎、原隊で十九年十二月に別れた宮路に、それぞれ四年ぶり五年ぶりの再会であった。海林以来の知人(宮島、小崎、宮路)であり、道路隊の同年兵である。四年間でたった三人、シベリアで一人よくもまあソ連は同部隊の人間をばらばらに収容したと感心した。久しぶりに映画を見せてもらった。タイトルは忘れた。キスシーンがあり、日本は変わったと思った。もう一編は、悲しき口笛、子供が主役であった、主演は美空ひばりと

後に分かった。

三十日朝宮門を出た。今度は進行方向に県別に乗車した。三弟、従弟が横浜から迎えに来てくれた。京都より鉄道員の従弟が迎えてくれた。大部分同県人で、民主教育の影響かソ同盟の真実を伝えようと井口やアクチーブの扇動か、車内の従弟等に話していた。私は真実の真実を話した。無茶小柄な補充兵の初年兵らしき男が、我々の中に反動がいるとわめいたが年配の兵にたしなめられた。私はこの小男をぶん殴ってやろうと思ったが、馬鹿の一つ覚えのようにアクチーブに洗脳された気の毒な男と思い、怒りを押さえた。

亀山駅からは同郷の青年団の皆様方が乗って来られた。ソ連の癖で握手攻めをした。また、町長の東善二さん、助役の橋爪幹雄さんのお出迎えを受けた。夕方頃郷里宮川駅に六年十月九日、昭和二十四年十月三十日降り立った。我が松倉の在所の方々にお出迎えへの御礼と戦争反対の挨拶をした。許嫁の中西恵巳子と十一月二十七日結ばれた。同級生はほとんど結婚しており、子供もたいていいいた。他人より三年は遅れたよ

うだが、家業の農業を継いだが、労働はきつく収入は少ないので、父のすすめで馬車による建材業を再開した。父とよく衝突したので、次弟を東京から呼び寄せ、二台の馬車で建材業、主に畑の床土を一メートルくらい取り、壁土として売り、後は田にする。このようにして土地を増していった。時代と共に馬が車となり、今はブルドーザー、シャベルローダー、ユンボ等、土木機械を使い、長男が家業を継いでいる。二男二女に恵まれたが次男は夭折した。農業くらい利益の上からぬものはない。老人農業でも作業しており、末はどうなる事か。私ら余命幾ばくもなく、なるようにしかならないのだ。今まで苦勞はあったが運が良く生活の困る事もなく来たが、孫の代は分からない。余生を楽しく暮らしていきたい。

ソ連抑留の顛末

三重県 加藤 千春

一、はじめに―私の履歴

昭和六十四（一九八九）年一月七日、昭和天皇は身まかれた。波乱万丈の昭和は幕を閉じた。昭和の時代を青春の時代を生き抜いた、語り尽くせぬ昭和の思い出のその悲しみと喜びは、このまま風化してしまいたくない。私は昭和の御代の子であった。私の激動の昭和を回顧する。

昭和六年小学校入学―十二年中学入学―十六年中学五年陸士受験―二十年六月陸士（本科）卒業―終戦―ソ連抑留生活―帰国（二十三年十一月）―歯科大学受験―同卒業（二十七年）―歯科医業現在に至る。

二、私の抑留の経過（昭和の出来事の中からソ連抑留に関係するものに限定する）

抑留の原因